ジョルジュ・フリードマンの軌跡と著作－機械と人間－

門　部　昌　志

Les traces et les œuvres de Georges Friedmann: le machinisme et le humanisme

Masashi MOMBE

ジョルジュ-フィリップ・フリードマン（Georges-Philippe Friedmann [1902-1977]）は、戦後フランスで労働社会学の発展と社会学再生の動きに参画した。1960年代初頭になると、ジョルジュ・フリードマン（以下、G.F.と略記）は、高等研究院第六部門のマス・コミュニケーション研究センターの設立を主導した。日本へのG.F.の本格的な紹介は1970年代になされたが、近年では、例外を除き彼は忘却されている。2011年の拙稿「ジョルジュ・フリードマンの軌跡－メディアとコミュニケーションをめぐって－」では、彼の生涯を概観し、労働社会学を経てマス・コミュニケーション研究に向かう過程を素描した。G.F.は、機械と人間の関係という問題を、労働や余暇の分野で探求したとも考えられる。戦前のG.F.は思想誌の刊行など、メディア実践に関与した。戦後の彼にとって、余暇の技術ないしメディアは研究対象でもある。本稿では、機械と人間の関係という主題の理論的背景を探る。第１章は、G.F.の軌跡や研究主題、再評価に関する前稿への補足である。前稿との過度の重複を回避しつつ、本稿からの読者にも配慮したい。G.F.の『ライプニッツとスピノザ』（以下*Leibniz et Spinoza*）を読解する前提として、第２章では、社会学におけるライプニッツ受容の歴史と近年の再評価の動向について述べる。第３章では、*Leibnizet Spinoza*の１章を読解することで、G.F.における機械論と人間論への関心を確認する。

１.「フリードマンの軌跡」と著作、再評価

1.1 戦後のフランス社会学とフリードマンの寄与

前稿への第一の補足として、戦後フランス社会学の再建に対するG.F.の個人的寄与を、全体的な状況に位置づけておく。その前に、フランス社会学の一般的なイメージから出発したい。社会学でフランスといえば、sociologieという言葉を創造したA.コント（1798-1857）や『模倣の法則』（1890年）で知られるG.タルド（1843-1904）といった19世紀の先駆者に加え、19世紀末から20世紀初頭にかけて古典的社会学の基礎を築いたÉ.デュルケーム（1858-1917）、贈与論と身体技法論を展開したM.モース（1872-1950）、集合的記憶論や聖地論を展開したM.アルヴァクス（1877-1945）ら「フランス社会学派」がいる。20世紀後半にはA.トゥレーヌやH.ルフェーヴル、J.ボードリヤール、P.ブルデューらを輩出したことはよく知られている。この華やかなイメージに欠けているのは、戦後フランス社会学の苦況である。『社会学の現代的潮流』（2008年）によれば、1945年に戦争が終わった時、「フランス社会学はもはやほとんど存在していなかった」。戦争、占領、解

放に至る過程で破壊を被った社会の再建が先決課題であった。1939年の水準に国内総生産が回復したのは1950年頃であり、1950年代には配給も行われていた（Béraud et Coulmont, 2008:19)。当時の社会的コンテクストは、「社会学」の再建を促すようなものではなかった。では、学問「内部」の状況はどうであったか。戦争に加え、世代交代が次の論点となる。20世紀初頭にデュルケームの牽引力に引き寄せられた人々は、1945年には没していたか引退に近い状態であった。アルヴァクスは1945年に強制収容所で亡くなり、モースは公的舞台から退いていた[1]。ただし、フランス社会学の困難を捉えるにはさらに時代を遡る必要がある。そもそも、デュルケーム学派の成功は限定的なものであった。社会学から離脱した一部のデュルケーミアンの動向は、他の学問の改革を志向するデュルケーム的野心と重なっていたが、社会学の基礎づけには貢献しなかった(Béraud et Coulmont, 2008:20)。第一次世界大戦により若き社会学徒の命が失われ、1917年には、原動力かつ指導者のデュルケームが没した（Simon, 2002:367)。第一次世界大戦後、既にフランス社会学派にとって困難な状況が到来していた。更なる戦争と占領、解放を経た後の第二次世界大戦後のフランスの大学では、フランス全体で４～５人の教員が社会学講座を保持していたにすぎず、社会学が定着したとは言いがたい状況であった。1945年当時、社会学の教育課程は哲学の学士課程に属しており、社会学のディプロム取得のため大学に登録することはまだ可能ではなかった。1930年代には、デュルケーミアンのC.ブーグレのもと、R.アロンやG.F.らの勤務した、高等師範学校の社会資料センターが存在した[2]。社会学の研究センターの萌芽は、第二次世界大戦の終わりまで存続できなかった（Béraud et Coulmont, 2008:20)。

1945年は、フランス社会学の「零年」であった。しかし、この状況から、社会学再建に向けた動きが始まる。まずは学術雑誌である。「1945年において、いかなる社会学の雑誌も、もはや存在していなかった」(Béraud et Coulmont, 2008:31)。だが、1946年には、G.ギュルヴィッチが『国際社会学誌』*Cahiers internationaux de sociologie*創刊に携わる。彼は、1949年の『社会学年報』再刊の協力者でもあった。1956年には『宗教社会学アルシーヴ』が創設され（G. Le Bras主宰の研究集団の機関誌)、1959年には『労働社会学』 *Sociologie du travail*が創刊された。編集委員会にはA.トゥレーヌやM.クロジェ、J.-D.レイノーらがおり、G.F.は委員長présidentであった。1960年には、R.アロンにより『欧州社会学アルシーヴ』が創刊された。1961年には、レヴィ＝ストロースを編者とする『人間』が創刊され、社会学にも影響を及ぼす（Béraud et Coulmont, 2008:31)。同年『労働社会学』にG.F.の寄稿した「労働社会学と民族学」では早くもレヴィ＝ストロースが言及されている。しかしG.F.が強調したのは「歴史」である。近代社会との「文化接触」による伝統社会の文化変容acculturationに関する民族学者の研究の、労働社会学的な重要性が指摘された（Friedmann, 1961:109)。次に、戦後には、幾つかの出版社で、社会学関連の叢書が創設された。ギュルヴィッチは、フランス大学出版で「現代社会学叢書」の責任者となった。また、国立科学研究センター（C.N.R.S.）では、社会学研究センター[3]の仕事を発表するため、新たな叢書が作られた。1950年代末から1960年代初頭にかけて、ギュルヴィッチ編『社会学概論』、G.F.とナヴィル編『労働社会学概論』などの手引書が刊行された（Béraud et Coulmont, 2008:31)。

第二次世界大戦後の社会や社会学の状況を背景に1945年は「零年」にたとえられた。学術雑誌の創刊や研究センターの設立、叢書や手引書の刊行という動きのなかで、1950年代のG.F.は、

1　時代順の説明とはいえ、読者を意気阻喪に導くこの記述は、学士課程向けテキストとしてはやや異例と思われる。2002年にブルデューが逝去した後の2008年に本書が刊行されたことは偶然であるのだろうか。
2　広告の心理学的調査やフランスにおけるカトリック的実践の調査が行われた。
3　社会学研究センターの主催により、「産業主義と技術家主義」（1948年）や「都市と田舎」（1951年）など、多様な主題を扱った「社会学週間」が開催された（Valade, 2001:24)。

『労働社会学』創刊や『労働社会学概論』の刊行を通じ、労働社会学の発展と社会学再建の動きに貢献した。戦後から1960年代半ばまで、ギュルヴィッチやアロンらとともに、G.F.はフランス社会学の「パトロン」であった（Béraud et Coulmont, 2008:24-25）。

1.2 著作とテーマ

前稿に補足すべき第二の点は、研究テーマに関連する。G.F.の著作はドメスティックな主題（マス・カルチャー、都市と田舎など）のみならず、ソ連やラテン・アメリカなど非西欧の大陸にも関連する。多様な主題の中心には機械と人間の関係がある。G.F.は生産の技術に加え、余暇の技術を研究するに至った。ただし、1946年の『産業機械化の人間的諸問題』でG.F.が、余暇の機械（映画、ラジオ、テレビなど）に言及していたことに留意する必要がある。

『産業機械化の人間的諸問題』（1946年）初版の序文でG.F.は、「機械と人間主義」三部作の構想を提示する。第一は、西欧における「進歩のイデオロギーの危機」である（19世紀末から第二次世界大戦前夜まで）。著作としては『進歩の危機』（1936年）に対応する。第二の著作、『産業機械化の人間的諸問題』では、大企業の工場の調査と分析が企図される。この著作の研究対象は、「人間と**生産**の機械との相互的な関係」である。工場労働における機械と人間との関係は、『人間の労働はどこへ行く？』（1950年）、『細分化された労働』（1956年）などで継続して扱われ、ナヴィルとの共著『労働社会学概論』（1961～1962年）にまとめられる。『産業機械化の人間的諸問題』の初版の序文で、僅かではあるが、言及される第三の主題の系列がある。鉄道や自動車、飛行機といった**輸送**の機械、電信や電話などの**連絡**の機械、映画、ラジオ、テレビといった**余暇**の機械など、「技術文明」がそこで発達するような環境の総体の研究である（Friedmann, 1956:12）。これらを勘案すればG.F.は、戦後に労働社会学的研究を行った後にマス・コミュニケーション研究に転じたというよりも、後者の研究の方向性は戦後の時点で彼の計画に組み込まれていたことになる。1946年の時点で、G.F.は、技術的進歩のイデオロギー論、生産機械と人間との関係についての著書を刊行していた。余暇の機械など第三系列の機械と人間との関係についての著書は、1960年代に刊行される。1960年のマス・コミュニケーション研究センターの創設や1961年における機関誌『コミュニカシオン』創刊後、彼は『人間と技術についての七つの研究』（1966年）を出版する[4]。没後に刊行された論文集『これら素晴らしき道具』（1979年）を含めたG.F.の著作は第三系列の機械と人間の関係を研究した成果である。ただし、雑誌論文に注目すれば、労働社会学とマス・コミュニケーションに関する仕事の時期的な交差や重複が視野に入る。G.F.は、1950年代にマス・コミュニケーション関連の論考を雑誌に発表しており、1960年代初頭には『労働社会学概論』など労働社会学関連の著書を刊行していた。

1.3 フリードマン再評価における幾つかのメルクマール

前稿に補足すべき第三の点は、再評価についてである。前稿では、2000年代以降における再読の動向に言及した。ここでは時代を遡り、幾つかのメルクマールを指摘したい。

1970年にG.F.の自伝的著作『力と知恵』が刊行された後、1977年に彼は没する。その間の1973年に論文集『新たなる文明？ ジョルジュ・フリードマンへのオマージュ』（ガリマール社）が刊行された（Collectif, 1973）。執筆陣は、A.トゥレーヌ、E.モラン、R.バルト、C.ブレモンら、

4　本書に収録された「都市と田舎について」（1951年３月の会議「第二回社会学週間」の序論に加筆）では技術が分類されている。工業のみならず農業をも含む「生産」の技術、行政および「分配」の技術、家庭電化製品など「消費」の技術、さらに、「さまざまの輸送技術」、「連絡とコミュニケーションの技術」（電信、電話、無線電信、ラジオ、テレビ）、そして「余暇の技術」（映画とラジオを含む「ザ・ビッグ・ツウ」）である。生産、分配、消費の区別はマルクス的である。G.F.はこれら「技術環境」が、「自然環境」との相対的な対比を前提とするという（フリードマン、1966：100）。

総勢21名である。第一部は人間と社会、第二部は労働と余暇、第三部は教育、第四部は言語活動とコミュニケーションが主題である。接点のあった人々がG.F.に触発されて執筆した論考や彼の主題を生産的に引き継ぐ論考を読むと、副題「フリードマンへのオマージュ」が重みを持ってくる。ここでは二論文を確認する。人間と社会を主題とする第一部の巻頭はトゥレーヌの論文である。社会に対する社会の行為としての「歴史性」が主題であり、社会運動の社会学、行為の社会学について述べられる。紛争より合意を重視するという、定型的な機能主義社会学批判は本質的なものではないとされ、紛争の社会的機能の研究（L.コーザー）も言及される。秩序の社会学と運動の社会学が提示されるとはいえ、究極的には合意の社会学と紛争の社会学の対立は批判され、トゥレーヌは、古典的社会学の主題を排除することなく、その限界を示す。この巻頭論文では、パーソンズのシステム論が言及されたのに対し、モランの第二論文では、自己組織的なシステム論[5]を枠組みとして、自然環境／技術的環境というG.F.の概念から、社会的エコロジーの研究が展望される。ボードリヤールの『消費社会』(1970年）刊行後、E.モランは、1973年の論考で、労働社会学で知られるG.F.の仕事からエコロジカルな視点を引き出していた。

第二のメルクマールは、生誕100周年の2002年６月７日に高等師範学校で開催されたコロックであり、2004年に『世紀のなかの社会学者ジョルジュ・フリードマン 1902-1977』[6] として刊行されたものである（Grémion et Piotet, 2004)。序文に加え、「歴史」と題された第一部には、主に第二次世界大戦までの軌跡に関する論考が収められ、『マルクス主義評論』やソ連旅行、トゥールーズでの研究やレジスタンスへの関与が論じられる。「著作」と題された第二部では、哲学、産業社会学ないし労働社会学、ユダヤ人問題を扱ったG.F.の著作が論じられる。第二部には、彼の*Leibniz et Spinoza*についての論考「哲学者フリードマン」が含まれる（Lautman, 2004)。「証言」と題された第三部は、E.モランから始まりA.トゥレーヌで閉じられる。J.-D.レイノーの問いは興味深い。「哲学者、ライプニッツとスピノザの読者が、とりわけ第二次世界大戦後において、なぜフランスの経験社会学刷新の主要なアクターの一人であったのか」(Grémion et Piotet, 2004:171)。

第三に、近年のG.F.再評価についてである。前稿では、2009年刊行のTh.ピロンによるフリードマン論 (Pillon, 2009）と2003年初版刊行のTh.ピロンとF.ヴァタンの共著に言及した（Pillon et Vatin, 2007)。補足すべきは、2011年に刊行されたA.ブルーノの『ジョルジュ・フリードマン 生・著作・概念』である（Bruno, 2011)[7]。これらの出版状況により、2002年のコロックから2010年代初頭まで、僅かながら、関連書が断続的に出版されていることがわかる[8]。

２．社会学におけるライプニッツ受容

『新たなる文明？』の克明な文献目録を見る限り、G.F.の雑誌論文は膨大で、総体的な内容

5　開放系のシステムと環境の関係を重視したシステム論である。純粋に物理的な物などを例とする「閉じたシステム」に対し、生きた組織体などが「開かれたシステム」の例であり、後者は環境（エコシステム）に対して同化的、交換的、相補的（物質-エネルギー、情報など）関係にある（Collectif, 1973:47)。

6　本書のタイトルは、『時代のなかの社会学者』とも訳せるはずで、日本語としては、その方が自然である。ただし、フリードマンの生涯が20世紀の大部分と重なることを考慮し、このように試訳した。

7　Th.ピロンの協力も得たこの著作は、コンパクトながら、G.F.の主要な著作と概念を概観でき、語彙集や年表も付されている。G.F.の軌跡や『産業機械化の人間的諸問題』読解に捧げられたピロンの著作と相補的に読まれるべきものであろう。

8　ここでは、書名を手がかりとして、フリードマンに関わる主な出版動向に言及した。書物のなかでなされる言及を考慮すれば、また、異なるイメージが浮かび上がるはずである。

把握は困難である。考察を著作に限定した場合、主題の焦点として労働や技術文明が浮かび上がるが、彼の著作目録は意外な書物を含む。それが*Leibniz et Spinoza*である。哲学から出発したとはいえ、第二次世界大戦後、労働社会学の分野で活躍した人物が、なぜこのような著作を記したのか。他の著作との関係はいかなるものか。G.F.の*Leibniz et Spinoza*は様々な問いを喚起する。しかし、G.F.にとっては当然のことであったかもしれない。1930年代初頭の論考で既にG.F.はスピノザとライプニッツを個別に論じていた[9]。1936年の「唯物論的弁証法と相互作用」では、マルクスとエンゲルスの哲学的形成に影響を及ぼした人物としてスピノザが言及される（Friedmann, 1936）。G.F.にとって、ライプニッツとスピノザの関係は、マルクスへの関心と無関係ではなかったはずである。1940年になると、ユダヤ人のG.F.は、ヴィシー法により職と資産と仏国籍を剥奪された（Pillon, 2009:9）。1944年までの「強制的休暇」(Lauteman）の間、G.F.は論文を執筆した[10] (Grémion et Piotet, 2004:95)。G.F.の*Leibniz et Spinoza*は、彼の主著『産業機械化の人間的諸問題』とともに国家博士論文を構成するもので、いずれも1946年に刊行された。両者とも重要な仕事のはずである。しかし、社会学者は、例外を除き[11]、G.F.の*Leibniz et Spinoza*にはあまり言及しない。他方、ライプニッツとスピノザに関する研究では、G.F.は言及される（スチュアート、2011；ドゥルーズ、1991；谷川、2006）。特にレールケの『スピノザの読者ライプニッツ』では、G.F.は、シュタインとともに、「古典的研究」と位置づけられている（Lærke, 2008:44）。また、ライプニッツの著作に付された参考文献の一覧にもG.F.の*Leibniz et Spinoza*が見られる（Leibniz, 2002: xxxvii）。

2.1 デュルケームとカッシーラー：思考のカテゴリーと社会

戦後に社会学者として活躍したG.F.による*Leibniz et Spinoza*（1946年）は、社会学と哲学の関係について考えさせる書物である。その読解に移る前に、2章では、社会学と哲学の関係及び社会学におけるライプニッツ受容の歴史と現代の動向を確認する。

古典的社会学の創設者の一人、デュルケームは『社会学と哲学』という著作を残した。ここでは彼の集合表象論をめぐるカッシーラーとの対立を取り上げる。デュルケームの見解は、認識のカテゴリーが社会的に形成されると考える点で、カント哲学とは異なっていた。『宗教生活の原初形態』(1912年）の冒頭でデュルケームは述べる。時間や空間、原因、実体などのカテゴリーが、思考を拘束する固い枠のようなものとして考えられてきたのに対し、原初的な宗教の信念を分析した彼は、思考のカテゴリーが宗教的な起源を持ち、それらが社会的なもの、集合的思考の産物であるとする。思考のカテゴリーは、固定されたものではなく、絶えず形成され、解体され、再形成される。思考のカテゴリーは場所や時代によって異なるとするデュルケームは、「カテゴリーの社会的起源」l'origine sociale des catégoriesを想定する（Durkheim, 1998:21）。デュルケームのこの著作は、『カント著作集』刊行に従事したE.カッシーラーに批判された。『シンボル形式の哲学　第二巻神話的思考』(1925年）でカッシーラーは、神話的意識を社会学的に説明するデュルケームの試みを「もっとも徹底した、またもっとも整合的な試み」と形容しつつ、それが「一面的」とする。デュルケーム的思考では、空間や時間、実体や因果の概念は、「個人的な思考の所産ではなく社会的な思考の所産」と捉えられる。しかし、デュルケームが「社会の存在からみち

9　彼は1930年にスピノザの書簡を、1931年には、ライプニッツの『形而上学叙説』を論じた（Friedmann, 1987:48, 58）。

10　この時期はトゥールーズでレジスタンスに参加していた時期でもある(Grémion et Piotet, 2004)。

11　『パスカル的省察』の著者ブルデューは、G.F.の*Leibniz et Spinoza*に辛口の評価を下した（Béraud et Coulmont, 2008:26）。しかし、レールケの大著『スピノザの読者ライプニッツ』では、批判と援用、翻訳の引用など、G.F.への夥しい言及がある（Lærke, 2008）。

びきだされるはずだと考えたカテゴリーの方が、むしろこの社会の存在の成立条件となっているのではないか」。「社会構造」は、宗教的カテゴリーの原因というよりむしろ、「そうしたカテゴリーによって決定的に規定されている」(カッシーラー、1991：357-358)。デュルケームの「一面性」を批判したカッシーラーは、教条主義者ではなかった。カッシーラーは、カントがあまり論じなかった「言語」を『シンボル形式の哲学』第一巻で扱った後、第二巻で神話的思考を論じ、デュルケームを批判した。第二次世界大戦後に構造主義が流行する前に、デュルケームとカッシーラーは、宗教や神話を研究するに至り[12]、ともにカント的立場から離れた場所で対立が生じていた。思考のカテゴリーが社会的に形成されるという見方と、社会それ自体が思考のカテゴリーに依存しているという見方の対立である。思考のカテゴリーと社会の相互的関係を考えれば、双方とも一面的であるのかもしれないが。

2.2 デュルケームとタルド：巨大建造物と個人

デュルケームに批判された人物として長らく記憶されてきたのがG.タルドである。前者が古典的社会学の創設者の一人であっただけに、ある時期まで[13]、否定的なタルド像が社会学では優勢であった。だが、近年、タルドとモナドロジーの関連が再発見されている。1893年、R.ウォルムス（René Worms）は『国際社会学評論』(*Revue internationale de sociologie*)[14] を創刊、その第 2 号と第 3 号にタルドは「モナドと社会科学」を発表した。その後、1895年に刊行された論文集に「モナドロジーと社会学」が収録された。約100年後の1999年、大陸哲学から再評価されたタルド著作集の刊行がフランスで始まる。第一巻は、タルドの「モナドロジーと社会学」、E.アリエズの序文とM.ラッツァラート[15]の後書からなる。

後書で、ラッツァラートは、社会的なものの拘束性ないし強制性をめぐるデュルケームとタルドの対立に注意を喚起する。『社会法則』(1898年）でタルドにより要約されたデュルケーム的発想は次のようなものである。文法や法典、そして神学などの社会的偉業ないし「巨大建造物は、個人の動きから構成されたものであるどころか、その反対に個人を構成する因子であって、個人の人格から独立して存在し、個人のうえに圧倒的な影響を及ぼすものとして、一方的に個人を支配するものなのだ」(タルド、2008：104)。タルド自身、社会的に形成されたものの個人への影響力を認めている。それは「まれに強制によって」、そして「説得や暗示」、また「快楽」によるとされ、タルドは諸個人の「自発性spontanéité」も想定している。さらに、タルドは問う。そうした巨大建造物は「どのように構成されたのだろうか」、と（タルド、2008：104)。ラッツァラートはタルド的なデュルケーム批判を要約する。「社会的なものと心理的なもの（情動的なもの）のこの分離を基礎としているため、デュルケーム社会学は、どのようにして社会的実在が構成されるかも、とりわけ、どのようにしてそれらは進化し、変容し、自らがそうであるところのものとは異なるものに成るのか、をも明示するには至らなかった」(Lazzarato, 1999:135)。デュルケームとタルドの対立は、社会学を超えた意義を持つ。デュルケーム理論は、ある時期の社会科学や

12　カッシーラーはトーテミズムを論じつつ「構造的思考」について述べた（カッシーラー、1991：372)。
13　双方の論争を辿り、デュルケームによる批判を吟味する試みも日本に紹介されている（ベナール、1996)。
14　R.ウォルムスは1893年の『国際社会学評論』創刊とともに「国際社会学協会」を作った。これに伴い『国際社会学叢書』の刊行が始まる。1895年、ウォルムスは「パリ社会学会」を結成する。主会員は、専門家ではなく社会学に興味をもつ人々で、月に一度、自由なテーマ設定で例会が開かれた。タルドは初代会長であった（内藤、1988：59)。創刊当時は、二ヶ月に一冊のペースで刊行されていた（2 年目の1894年から毎月刊行)。当時の目次は、論文、ノート、社会運動のクロニック、分析された著作や定期刊行物のセクションに分けられていた。なお、『国際社会学評論』は、Gallica で閲覧できる。
15　Lazzaratoの日本語表記については、『出来事のポリティクス』(村澤真保呂、中倉智徳訳）を参照した。

人文科学のモデルとなった。フランス構造主義の形成に寄与したソシュールの言語学との影響関係も様々に論じられてきた[16]。デュルケームの思考が構造主義的なものだとすれば[17]、彼と対立したタルドの再評価は、フーコーやドゥルーズといった哲学者による構造主義批判の後になされた(Lazzarato, 1999:134-137)。タルド再評価の経緯は一般的な説明である。ラッツァラートの議論で興味深いのは、タルドにおける社会と個人の関係が「モナド間の関係に基づいて解釈されるべき」という指摘である（Lazzarato, 1999:136)。

上記の議論はタルドに傾斜している。一般的解釈のみならず、19世紀末の社会学におけるショーペンハウアーやベルグソン、ニーチェの影響を考慮したデュルケーム再読の試み――直接的な影響関係の証明ではない――が存在する（Meštrović, 1992:27-29)。批判の後、新解釈によりタルドは再評価された。同様に、別解釈によるデュルケーム再読の余地もある。例えば、ラッツァラートの読者でもあるスコット・ラッシュにとって、デュルケームの『宗教生活の原初形態』は、「自然から文化への移行」ないし「文化の起源」のみならず、聖なる「インテンシヴな文化」の起源についての書物でもある[18] (Lash, 2010:155)。

2.3 ラッシュにおけるジンメル：「社会化」と「メディア化」

『モナドロジーと社会学』に後書きを寄せたM.ラッツァラートのタルド論、*Puissances de l'invention*をうけ、S・ラッシュは、『インテンシヴな文化』(2010年）の二章で、社会学者であり生の哲学者でもあるジンメルの著作を生気論の観点から再検討した。外的因果性や線形的論理と結びつく機械論に対し、生気論は自己原因や非線形性を特徴とする。生気論にとって運動や流動は重要である。ラッシュは、ジンメルにおける生気論の社会学化を企て、メディアとコミュニケーション時代の社会学的生気論を展開する（Lash, 2010:23)。

ジンメルは、カントの「自然モナド論」について学位論文を執筆した（ジンメル、2004)。初期カントとライプニッツのモナドロジーとニュートンの原子論をジンメルは対比した。前批判期カントのモナドロジーを、ジンメルは、実証主義的な「思索的原子論」のため拒絶した（Lash, 2010:34)。一般にジンメルは、初期は実証主義者、中期は新カント派、後期は生気論者とされる。だがラッシュによれば、ジンメルの全著作に実証主義と生気論の要素がある。ベルグソン受容の後は、力点移行もあるが、20歳になる前のジンメルは、ベルリン大学哲学及び民族心理学部に所属、学生時代からニーチェやショーペンハウアーの読者であった。「初期ジンメルにおける実証主義的進化論の思索的原子論は、実に、後期ジンメルの生気論と創造的進化論になる*becomes*。ジンメルは、常に流動fluxやモナドの観点から物質substanceを理解した」(Lash, 2010:34)。

S.ラッシュはロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ現代文化研究センターのディレクターである。彼はジンメル再読を手がかりに、グローバル化と情報の時代の文化論を展開する。ジンメルの生きた産業資本主義時代において、「社会的なもの」の出現は社会学形成の背景となった。情報時代では、メディアとコミュニケーションの偏在性が「社会的なもの」を揺るがしている。

16　言語は社会的事実であるというソシュールの主張に関して、メストロビッチは、1930年代におけるDoroszewskiの議論に言及している。また、ソシュールがデュルケームの影響を受けていたとするDoroszewskiの見解には多くの言語学者が反対したというHarrisの見解も言及される（Meštrović, 1992:72, 89)。メストロビッチはまた、言語が社会的事実であるという見方がタルドとデュルケームの論争の調停だというDoroszewskiの見解も紹介する。それによれば、言語の集合的側面はデュルケームへの譲歩であり、より個人的な発話はタルドへの譲歩である(Meštrović, 1992:72) 。

17　拘束力をもつ構造の概念と変換体系を通じて見出されるレヴィ＝ストロース的な構造概念とは区別した方がよいかもしれない。なお、複数のフランス構造主義が考えられる点はF.ドッスの著作を参照。

18　デュルケーム論の文脈では、「聖なるもの」がインテンシヴ、「俗なるもの」がエクステンシヴとされるが、両者の弁証法も考えられる(Lash, 2010:155)。社会的事実におけるインテンシヴとエクステンシヴの両側面に言及するラッシュは、宗教でも、各々、二側面に関わる事例を取り上げる（Lash, 2010:183)。

ラッシュは、情報の時代には、生気論を変えなければならないとし、ジンメルの「社会化」を再検討する。日常的には、「社会」は、国家や家族、教会、そして階級や目的団体などといった「名のある統一的構成物に客体化された相互関係」を指す。しかし、ジンメルは、統一的構成物には至らない流動的社会関係がより根本的とする。「人間の社会関係は、絶えず結ばれては解け、解けては再び結ばれるもので……永遠の流動及び脈搏として多くの個人を結び合わせるものである」。この観点からすれば、大制度や個人を超えた組織は、個人間の相互作用の「結晶」として捉えられる。結晶は生命と対立しうる。しかし、ジンメルは社会ではなく社会化を強調する。「社会というのは、もともと、機能的なもの、諸個人の能動的及び受動的な活動のことであって、この根本性格から見れば、社会（Gesellschaft）というより、社会化（Vergesellschaftung）と言うべきものである（ジンメル、1979：20-22)。しかし、ラッシュによればジンメルの「社会化」は、情報時代には、徐々にmediatization（メディア化・併合）に取って代わられている[19]。

2.4 ラトゥールによるタルド：ミクロ-マクロ・リンクの反転

『インテンシヴな文化』でラッシュは、過去25年間における傑出した社会学者としてU.ベックやN.ルーマンとともに、B.ラトゥールを挙げていた。彼もタルド再評価に関わる人物である。1999年のタルド著作集刊行後、2005年には、ラトゥールがオルタナティヴな社会理論、さらにはアクターネットワーク理論の先駆者としてタルドをとりあげていた（Latour, 2005:14-15)。彼の言及した幾つかの特徴をここで確認しておきたい。

政治、経済、法、生物学、科学など各専門分野で説明できない残余として「社会的なもの」が設定されることにラトゥールは批判的であった。これに対し、彼は、異質な要素の連合associationの痕跡trailを「社会的なもの」とする。特定領域としての「社会的なもの」の学問ではなく、異質な要素の連合の痕跡を研究するアソシエーション学の立場から、ラトゥールは、タルドの「社会的なもの」に注目する。彼によると、タルドにおいては、第一に、社会ないし「社会的なもの」が独自な仕方で定義されている。デュルケームとは異なり、タルドは、「社会的なもの」the socialを現実の特定領域ではなく「結合の原理」principle of connectionsと考えた(Latour, 2005:13)。しかも、タルドにおいて、「社会的なもの」は、特定の組織ではなく、循環する流動fluidとしてダイナミックに捉えられた。特定領域ではなく結合原理として社会的なものを把握するタルドは、動物や細胞、天体の社会にも言及する。彼にとって、「あらゆる事物は社会であり、あらゆる現象は社会的事実である」（タルド、2008：163)。ライプニッツのモナドロジーに学びつつも、タルドは神という前提を取り去る。興味深い第二の点は、反転された「ミクロとマクロのリンク」という発想である（Latour, 2005:14)。社会的事実における規則や秩序、発展を観察するために「高所からすべてを広く一望する視点」を重視する見方に対し、タルドはその逆

19　ラッシュによれば、グローバル化と情報の時代における間主観性は、遠隔的なものであり、メディア化されている。これは技術化にも関連する。産業社会の意味パラダイムは、主体の課す形式により意味が可能になるという認識の観念であった。ジンメルは社会制度による意味規定を問題にし、ラッシュは、今日のメディアによる意味形成の力を重視する（Lash, 2010:38)。ジンメルにとって重要な価値だったのは高揚を目指して闘争する過剰な生であり、差異であったが、メディア化の中心的価値はそれ以下のものである。グローバル化時代の遠隔的文化では、差異も遠隔的である。ジンメルの生きた産業資本主義時代における、(実質に対する）形式は商品や交換価値であった。情報の時代には、「グローバルなメディアスケープ」を再生産する記号-価値がある。「生気論的実質としての差異」は変質した。メディア社会における権力は、外因的で機械的なものから自己原因的でサイバネティック的なものに移行した。ジンメルの相互主観性は「流動」fluxを含み、その「流動」は緊張、闘争、葛藤と関連する。「流動」が自己目的的だとすれば、「流れ」flowは外部から左右される外因的なものである。ラッシュの問題提起は、やや図式的ではあるが、グローバル化と情報の時代における外因的な「流れ」を、再帰性の導入により、自己原因的な「流動」にすることである（Lash, 2010:40)。

が正しいとする（タルド、2008：91-92）。「『大』によって『小』を、『大部』によって『細部』を説明する代わりに、私は小さな要素的作用の集積によって全体の類似を説明するのである。それは小によって大を、細部によって大部を説明することでもある。このような観点は、微分法の導入が数学にもたらした変化と同じような変化を社会学にもたらすはずである」（タルド、2008：42）。反転されたミクロ-マクロ・リンクの思考は、デュルケームとタルドとの論争に通じる。第三に、社会的結合の観点から科学を論じ、イノヴェーションに関心を抱く点で、タルドはアクターネットワーク理論の先駆者と見なされている。

タルドやジンメルを読み直すこれらの作業は、モナドロジーの現代的解釈を前提とする。モナド論をシステム論に関連づけるラッシュによれば、モナドは、分割不可能性、自己決定性、精神との類似性（モナドはある観点を通した知覚である）、能動性（外的な原因ではなく内的な原因によって変化）、モナド間の知覚における関係性、記憶（過去・現在・現在を含む）を特徴とする。ラッシュによれば、ライプニッツの窓なきモナドは、自己組織的ではあるがオペレーションとしては閉じたルーマンの社会システム論に類似する（日本では西川アサキが関連する指摘を行っている）。モナドに対応するものをタルドやドゥルーズに探す場合、窓をもち、歴史や未来を包含しない、リゾーム的システムとなる（Lash, 2010:37）。

2.5 アルヴァクスとフリードマン

社会学におけるライプニッツ受容の例はタルドやジンメルのみではない[20]。ライプニッツに感心を抱いた社会学者のうち、G.F.との関係から注目されるのが[21]、M・アルヴァクスである。G.F.と親交のあったアルヴァクスは1907年に『ライプニッツ』を刊行した。集合的記憶論で知られるアルヴァクスは、20世紀初頭のライプニッツ論で記憶を論じていたのである。「……実体substanceにおける、典型的なpar excellence能動性の形態formeは記憶mémoireであり、そして実体がより能動的ではなくなっていくにつれ思い出す能力をそれは失う……」（Halbwachs, 1907: 82）。記憶と思い出をめぐる議論はモナド論に関連する。アルヴァクスによれば、滅びなき宇宙の鏡、モナドは不滅である。しかし、人間の魂は不滅に加えて不死でもある。魂は「常に自己の意識と思い出le souvenirを保つ」（Halbwachs, 1907:81）。アルヴァクスは、デュルケーム的な集合表象論とも通じる、記憶の社会的枠組み（時間・空間）を論じたことから、彼の記憶論とライプニッツ論の比較は一つの課題となる[22]。しかし、ここではG.F.との関係に光をあてる。アルヴァクスの『ライプニッツ』（1907年）出版から約40年後、G.F.は*Leibniz et Spinoza*（1946年）を刊行した。アルヴァクスへの言及はないが、コナトゥス論でG.F.は頻繁に記憶に言及する。コナトゥスの概念に関連して、G.F.は、若きライプニッツに対するホッブズの影響を指摘する（Friedmann, 1975:64）。この際、G.F.が援用したのは、「テンニースの古典的著作」とG.F.自身が形容する『ライプニッツとホッブズ』（1887年）である（Friedmann, 1975:357）。筆者は未見であるが、テンニースのこの著作は、クーチュラの著作とともに、アルヴァクスの『ライプニッツ』に記載されている。

2.6 哲学と社会学

G.F.の*Leibniz et Spinoza*は当初、意外な書物と思われた。しかし、社会学におけるライプニッ

20　現代社会学においては、ブルデューもライプニッツにしばしば言及している。

21　タルドとG.F.の関係は今後の検討課題である。タルドは、コレージュ・ド・フランスにおけるベルグソンの前任者であった（Latour, 2005:14）。政治的理由からG.F.はベルグソンに批判的であった。だからといって、G.F.がベルグソンのみならずタルドにも批判的であったとは限らないが、G.F.の*Leibniz et Spinoza*のIndexにタルドの名はない。しかし、タルドの著作には労働や機械の主題が含まれている。

22　ラッツァラートは*Puissances de l'invention*でアルヴァクスの記憶論に言及している。

ツ受容を辿ると、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ジンメル、テンニースやアルヴァクスらがライプニッツを論じていた。ここから幾つかの仮説を抽出する。(1) ディシプリンの形成過程に立ち会った草創期の研究者は、別の学問から新領域に赴いた開拓者である。だが、専門分化の過程ないし学の制度化を経た後、個別に回顧されると、草創期の錯綜した絡み合いは評価しがたい特異な活動と見なされる（学の発展、起源の忘却、眼差しの反転)。(2) 学の形成をめぐるこの一般的考察に欠けているのは哲学のメタ学問としての特殊性である。「百科学の教程の各分野は……それぞれが他の分野について論じるための補足的な立場としても役立ってきた」。この時、哲学は「諸科学の科学」、あるいは百科学から選びだされた「諸科学の科学の縮小版」である（セール、1990：202-203)。哲学を単に専門分野の一つと見るか、「諸科学の科学」と見るかに応じ、哲学と社会学の関係の議論も異なる。(3) 複数の社会学者によって論じられたライプニッツは、そもそも、特定の専門領域に還元できない人物である。G.F.は、ライプニッツを「モナドロジーの多元的で力強い創造者、数学者、哲学者、法学者juriste、歴史家、神学者、技師、外交官、近代最後の偉大な百科全書的精神」と呼ぶ（Friedmann, 1975:28)。G.F.自身、哲学、文学、経済学、歴史学、社会学、教育学、心理学、生理学を始め、広範な学問への関心を示した。その背景は、人間をめぐる「百科全書的精神」と思われる。

社会学におけるライプニッツ受容と再評価の事例を辿ってきた。タルドやジンメルを再評価するこれらの文献のように、フリードマンを読み直せるのか。スピノザとの対比からライプニッツ思想の形成過程を跡づけたG.F.の著作は、終着点としてのモナドロジーの応用に主眼を置いた書物とは隔たりがある。G.F.の著作に即して、再読のための視点を模索する必要がある。

3．フリードマンのライプニッツ論

1676年、ハーグのパフィリュン運河近くにあるスピノザの家で、ライプニッツは彼と出会った。この希有な出来事は古くから比較への興味を喚起してきた。1946年に刊行されたG.F.の*Leibniz et Spinoza*は、第一に、ライプニッツの文章を通してスピノザとの関係を検討する書物である。ライプニッツというプリズムを通して屈折し、時代により変貌するスピノザ像は、ライプニッツ自身を知る手がかりでもある[23]。結論では、ライプニッツとスピノザが対比される[24]。第二に、本書は、ライプニッツを貶化する議論への反論である。『ライプニッツとスピノザ』(1890年）の著者L.シュタインは、ライプニッツがスピノザ主義者の時期を経過したというテーゼを容認するため、以下のことを認めた。長期間デカルト主義を学んだライプニッツには、独創的な哲学的観念のない時期があり、スピノザの影響を受けるまで暗中模索であった等々。シュタインが重視したのは、『人間知性新論』の登場人物テオフィルによるスピノザ主義への傾斜の告白である。「以前私は別の方向にいささか進みすぎて、スピノザ主義者たちの側に傾き始めていました」。しかし、

23　*Leibniz et Spinoza*もまた、フリードマンというプリズムを通して変形され、屈折を被った変貌するイメージであり、その読解を通じてフリードマンの姿が浮彫になるかもしれない。

24　スピノザとライプニッツの対照は、序文では「哲学史の弁証法la dialectique de l'histoire de la philosophieにおけるテーゼとアンチテーゼの比類無き例」と見なされている。その対立は、後に、カント、ヘーゲル、マルクスらが時代を画した止揚dépassementsへと委ねられた（Friedmann, 1975: 35)。歴史の流れを辿るフリードマンの見方は、後年のコンテクストの投影をも含んでいたのであろうか。おそらく、後者の立場と対立するのは、特定の時代のコンテクストでテクストを読むアプローチである。例えば、ベラヴァルの著書を論じつつ、セールは、カントから遡ってデカルトを意味づけることの「歪み」を指摘する（セール、1985：142-143)。一般的には、このようなアプローチの方がより手堅いと思われるのは確かである。フリードマンの場合、マルクスへの関心は重要なものであり、ドイツ観念論や唯物論との関連からスピノザやライプニッツを論じることは、彼にとって意義があったと思われる。

「新しい知が、私にスピノザ主義を捨てさせたのです」（ライプニッツ、1993：58-59）。「告白」を重視したシュタインに対し、G.F.は、この登場人物がライプニッツ主義の利点を効果的に示すために考案されたものとした（Friedmann, 1975:192-193, 399）。テオフィルは、モナドロジーによってスピノザ主義から治癒した。彼がスピノザ主義者であったという想定により、モナドロジーは「当時における最も危険で悪評の高い教説への治療薬remède」、西洋キリスト教文明のための「薬品」pharmacopéeであることが示される（Friedmann, 1975:194）。さらに、G.F.は、シュタインの議論とは異なり、若き日のライプニッツが既に「決定的な方向性」を定めていたと見る（Friedmann,1975:22）。本書の第一章は、書簡や著作を通じて若き日のライプニッツの思考を辿り、晩年の学説の萌芽を遡及的に示している。その際、ライプニッツに影響を及ぼした（スピノザ以外の）人々が重視される。初期ライプニッツに後年の萌芽を見出す研究は他にもなされているが（エイトン、1990）、シュタインに対置されたG.F.の議論には複数の批判がある[25]。G.F.論である本稿では、ライプニッツ思想の形成過程をG.F.が辿る際、機械論的世界観から精神や個体へと議論の重心が移行する過程を確認する。

3.1 普遍的調和の観念とその帰結

初期と後期に関わる一章は重要である。第二次世界大戦の最中に本書を記したG.F.は、一章を「普遍的調和の原理」から書き始める。ライプニッツの普遍的調和の観念については、クザーヌスやブルーノ、ダヴィンチやケプラーの影響が指摘される。神学者で哲学者でもあるJ. H. Bisterfeldの文章には、「コスモスの完全な調和」、「多様性のなかの統一」、「最大から極小に至る全ての部分の調整coordinationと差異化」等の観念があり、ライプニッツは『結合法論』で、それらを賞賛した（Friedmann, 1975:52）。第二節では、神を前提に宇宙や運動が議論される。中心的主題は「普遍的調和の原理」の「哲学的帰結」である。調和が原理になると、全存在は調和の中で、精神により理解可能な「普遍的法則」の影響下で把握される。他方、無限に完全な精神、神は自我の原因であり、慣性の法則の影響を免れる。調和の原理は、運動し変化する宇宙を前提とし、変化を被る「差異を表す存在」des êtres présentant des différencesを前提とする。他方、私たちの精神が差異を知覚しなければ、調和の原理は「諸要素そのものの同一性」を認めない。後に不可識別者同一の原理と呼ばれるものの始まりをG.F.はここに見出す（Friedmann, 1975: 55-56）。「調和」の基礎は、十分な理由の原理である。定義上、調和が意味するのは、非－存在より大きな存在理由を、全体との関係で、理由にできなければ、いかなるものも存在しえない、ということである。可能なものの総体のうち、完成ないし本性を最も含むものが、存在するものの調和的全体をなす。「思考における調和は、多様性の統一として定義され、調和は思考それ自体である」（Friedmann, 1975:56）。このG.F.の議論に対しては、「調和」概念の意味の変化や概念的体系的価値の変化についての考察が欠けているとの見方もある（Lærke, 2008:70）。

3.2 機械論から精神論へ

第三節で言及されるのは、延長と速度のみを考慮する幾何学的方法で運動を説明するライプニッツの『抽象的運動論』（1671年）である。ただし、純粋な幾何学的原則が実在を説明するのに十分ではないとライプニッツが示唆したことにG.F.は注目する（Friedmann, 1975:58）。第四節の

25　レールケによると、テオフィルとライプニッツという物語論的区別を許容しないテクスト、*De libertate* でライプニッツは似たような告白をしているらしい（Lærke, 2008:45）。また、スチュワートは『人間知性新論』の序文を反証の根拠として挙げるのに加え、次のように述べている。「シュタインを反駁しようと思うがあまり、フリードマンは行きすぎてしまい、スピノザ主義にあやうくなりかねない危険なところまで行ったとライプニッツ自身思うようなことがどうして起こったのかを説明することは不可能だと思ってしまっているように思われる。」（スチュアート、2011：409）。

「『コナトゥス』の哲学と体系化の最初の努力」で注目されるのは『新物理学仮説』(1671年)で導入された分割できないもの、極小量indivisiblesである。物質的な広がりの漸進的分割による分解を試みれば、矛盾したアトム概念に、高低なき、分割しえない延長 étendue indivisibleの概念に至る。「点」は、広がりを欠く非延長的な統一体である。それは、非延長的なものから延長的なものへ、微分から積分へと移行させる一種の加算によって延長が構成されるところのものでもある(Friedmann, 1975:62)。アナロジーから、ライプニッツが「コナトゥス」を運動に導入することを指摘した後、G.F.は再度『抽象的運動論』に言及し、デカルト主義的な延長ないし広がりとは異なる議論を説明する。静止において物質はなく、静止と運動の関係は点と空間の関係とは異なる。しかし、静止と運動の関係は零と統一体の関係にたとえられる。点が空間に振る舞うように、運動に振る舞うものがコナトゥスである。それは「生まれつつある運動」である。

このコナトゥス論を起点として物体と精神の理論が描き出される。ライプニッツは、運動の理論を思考の理論に関連づけ、物体の本性を精神の本性に関連づける。「物体corpsは運動の場所であり、魂はコナトゥスの場所である」[26](Friedmann, 1975:63)。運動は物体の能動性activitéであり、思考la *cogitatio*は魂の能動性である。ただし、多数のコナトゥスから構成される物体の運動は、外的原因の影響をうけ、慣性の法則に従う。物体に記憶がないことはライプニッツの関心事に関連する。記憶がなければ精神の生活はなく道徳的な生活もない。G.F.は、精神と物体の理論を要約する。記憶のある精神は、変化を通じて永続的な一であり、実体の主要な質をもつ。他方、物体は、実体性を欠き、多様な要素の集合体agrégat と考えられる。ライプニッツが物体と精神の理論を展開する背景のコナトゥス論にはホッブズの影響がある。この理論を手がかりとして、ライプニッツは思考の最初の体系化を試み、機械論を超えた独自の哲学を展開した(Friedmann, 1975:64)。ライプニッツのパリ滞在時には、コナトゥスの哲学は深化する。記憶がある精神は、外的原因への自律性を持ちうると考えられた。ここに、G.F.はモナドの告知を読み取る。

3.3 不可分なる個体

精神も物体もコナトゥスからなる。だが「物体は記憶なきコナトゥスであるのに対し、精神は運動なきコナトゥスである」。物体と精神は、調和と同様、破壊しえない不滅のものとされる(Friedmann, 1975:65)。ここでは、分割できないものとしての個体という観念に留意したい。コナトゥスの哲学は機械論を超え、個体論に向かうライプニッツの思想を示す。哲学の大学入学資格試験のためのテーゼで17歳のライプニッツは、個体の分割不可能性を主張した。『新物理学仮説』や関連著作では、その思考はより前進する。コナトゥスの体系が存続させる実在は「個体」である。存在は、全体の諸要素である。つまり、集合体であれ統一体unitéであれ、各存在は普遍的調和に関連して自らの存在理由を持つ。均衡ないし普遍的交感sympathieの規則によって各個体は他の全ての個体と関連すると思われるが、実際には、その関連は間接的で、各個体を結びつけるのは普遍的調和の要請である。記憶を与えられた魂は、非物質的かつ不滅の点、形而上学

26　corpsは、「身体」ないし「物体」と訳しうる。村上(2012)やライプニッツ(2015)所収のホッブズ宛書簡などを参照した上、ホッブズの運動論やライプニッツの『抽象的運動論』などの文脈から最終的に「物体」とした。なお、ホッブズにおいて、小概念の「人間」は、大概念の「物体」に含まれる(ホッブス、2015:67)。

27　量において、無限大と無限小は確定されず、開かれている。普遍的調和の前提により「全存在は共鳴する」。物質は、無限分割されており、無限の反響を感じさせる。質においては、二重の無限性が、「被造物間の差異différencesの無限性」と「各被造物の秘められた豊かさの無限性」(後に「神の鏡」と言われる)がある。さらに「聖なる思考の秩序」の無限として、聖なる知性の可能な内容の無限性、可能な世界の無限性、神の知恵の無限性がある。奇妙なことに、二重の無限性についてのG.F.の記述を読んでいるとソシュールが想起される。しかし、聖なる本性の総体を表す存在という観念と恣意性の思考は根本的に異なるはずである。

的な点にあるとされ、不滅と見なされる。G.F.はこれをモナドの予表とする（Friedmann, 1975: 67-68)。6節では、ライプニッツ的無限主義が論じられ[27]、7節では思考のアルファベットと普遍記号が、8節ではキリスト教をめぐる問題が扱われ、結論を経て一章は閉じられる。

3.4 フリードマンにおけるライプニッツ受容、残された課題

*Leibniz et Spinoza*の1章を確認した。そこでは、宇宙、物質、運動をめぐる議論から、コナトゥス論を経て精神をめぐる議論へ、還元しえないものとしての個体論への移行が見られた。1章ではまた、17世紀のライプニッツにおける機械論的哲学ないし自然観から人間論への展開が跡づけられていた。本書は、その後、社会学者として活躍するG.F.のライプニッツ受容の記録でもある。しかし、不滅の魂が論じられる本書に社会学的意義が見いだせるのかと問う読者もいるはずである。ここでG.F.を再読する際に留意すべき論点を整理したい。第一に、本稿では、アルヴァクスのライプニッツ論でmémoireが言及され、G.F.もコナトゥス論の文脈でmémoireに言及したことを確認した。両者の相違については、今後、詳細な比較研究が必要となる。第二に、分割しえない個体の観念について。これはG.F.を介して社会学的に翻訳された可能性がある。テルサックによれば、レイノーにとって「フリードマンは、社会的アクターの還元しえないirréductible特徴を我々に認めさせる」。細分化された労働に直面した労働者でも「能力」や「意識」、「戦略」を失うわけではないなど（Terssac, 2001:102)、行為者の自律性が強調された。1946年の*Leibniz et Spinoza*では17世紀の機械論的世界観から精神が論じられ、還元しえない個体の観念が見出されたとすれば、同年に刊行された『産業機械化の人間的諸問題』では、20世紀の工場労働における機械化と人間の関係が扱われた。テルサックによれば、テイラー主義の限界を分析したG.F.が示したのは「実行者の自律性を消し去ろうと望むのは科学的でも合理的でもない」ということである（Terssac, 2001:102)。「還元しえない社会的アクターのパラダイム」は、単純な適用ではないにせよ、1950年代の労働社会学に影響を及ぼした（Terssac, 2001:103)。G.F.の労働社会学的著作と*Leibniz et Spinoza*の併読は、行為者の自律性をめぐる素朴な信念とは異なるものとして社会的アクターを再考する契機となりうるかもしれない。また、Terssacが述べたように、社会学は「拘束と戦略、構造とアクター、管理と自律」を考える必要性に絶えず直面しているとすれば、これらの関心から、G.F.の*Leibniz et Spinoza*や労働社会学の著作を読むことは課題になりうる。外的原因に対して自律性を持つ精神や普遍的調和の観念を、社会学者としてのG.F.はいかに読んだのか、と。第四は、人間と機械的技術との関係についてである。G.F.の*Leibniz et Spinoza*と、機械と人間の関係を論じた他の著作との隔たりの印象は拭いがたい。ここでは幾つかの接点を指摘する。坂本賢三によれば、「分解」や「組立」のできる機械をモデルとした機械論的自然観がデカルトによって定式化されたのに対し、ライプニッツは、蒸気機関が開発される時代に「物体に内在する力を主張し力を実体とする説」を唱えた。「『モナドロジー』を書いたとき（1714年）には、ニューコメンの大気圧機関がすでに実用化されていた」（坂本、1975：230)。*Leibniz et Spinoza*の1章でG.F.は、17世紀のライプニッツにおける機械論的自然観から精神論への移行の過程を辿った。他方、具体的な機械と人間の関係を論じたG.F.の著作では、機械をモデルとして自然が論じられるのではなく、「人間的ファクター」の観点から技術的機械を用いた労働が論じられる。ここには、対象の違いがあり（自然から人間労働へ)、理論的な重心の相違がある（科学的合理性から人間的ファクターへ)。『人間と技術についての七つの研究』で彼は、20世紀における技術の分類を示した。生産、分配、消費の技術、そして輸送やコミュニケーション、マスメディア。資本主義社会に埋め込まれてきた機械と人間の関係を問うG.F.は、マルクスの思考を援用する。人間に対する機械の影響の探求は、G.F.において、「弁証法的相互作用」の思考や分割しえない個体の思考が伴っていた可能性がある。ただし、機械と人間と

いう主題は、G.F.を超えて広がる。M.モースやルロワ＝グーランの技術論、そして、「機械学」(J. Lafitte) や「技術的人間主義」(X. Guchet) も考慮すべきかもしれない。

【引用参考文献リスト１】

Béraud, C et Coulmont, B. (2008) *Les courants contemporains de la sociologie,* PUF.

Bruno, A. (2011) *Georges Friedmann: vie œuvres* concepts, ellipses.

Comte, A.(1974)[1844] *Discours sur l'esprit positif,* Vrin.

Collectif (1973) *Une nouvelle civilisation? hommage à Georges Friedmann,* Gallimard.

Durkheim, É . (1998) "Objet de la recherche: sociologie religieuse et théorie de la connaissance", *in Les formes élémentaire de la vie religieuse,* PUF, pp.1-28.

Friedmann, G. (1936) "Matérialisme dialectique et action réciproque", in, *A la lumière du marxisme,* Éditions sociales internationales, pp.262-284.

—— (1956) [1946] "Avant-propos", in, *Machine et humanisme* Ⅱ*: problèmes humains du machinisme industriel,* Gallimard, pp. 11-14.

—— (1961) "Sociologie du travail et ethnologie", in, *Sociologie du travail,* avril-juin 1961, pp.105-112.

—— (1975) [1946, 1962] *Leibniz et Spinoza, Gallimard.*

—— (1987) *Journal de guerre 1939-1940,* édition établie et annotée par Marie-Thérèse Basse et Christian Bachelier, Gallimard.

Grémion, P. et Piotet, F. (dir.) (2004) *Georges Friedmann: un sociologue dans le siècle 1902-1977,* CNRS Editions.

Guchet, X.(2010) *Pour un humanisme technologique, PUF.*

Halbwachs, M. (1907) *Leibniz,* Librairie Paul Delaplane.

Lærke, M. (2008) *Leibniz lecteur de Spinoza: la genèse d'une opposition complexe,* Honoré champion éditeur.

Lash, S. (2010) *Intensive culture: social theory, religion and contemporary capitalism,* Sage.

Latour, B. (2005) *Reassembling the social*, Oxford university press.

Lautman, J. (2004) "Georges Friedmann philosophe", in, P. Grémion, et F. Piotet, (2004), pp.95-101.

Lazzarato, M.(1999) "Postface Gabriel Tarde: un vitalisme politique", in, *Œuvres de Gabriel Tarde volume* Ⅰ *Monadologie et sociologie,* Institut synthélabo, pp.103-150.

Leibniz, G.W. (2002) *Monadologie und andere metaphysische Schriften,* Französisch-deutsch,Felix meiner verlag.

Meštrović, S. G.(1992) *Durkheim and postmodern culture,* Aldine de Gruyter.

Pillon, T.(2009) *Lire Georges Friedmann, Problèmes humains du machinisme industriel,* ellipses.

Pillon, T et Vatin, F (2007) [2003] *Traité de sociologie du travail,* seconde édition, Octares éditions.

Simon, P.-J. (2002) "l'École française de sociologie", in, *Histoire de la sociologie,* PUF, pp.363-417.

Terssac, G. de (2001) " L'action organisée", in J.-M. Berthelot (dir.) *La sociologie française contemporaine,* PUF, pp.99-116.

Valade, B.(2001) "De l'École française de sociologie à la sociologie contemporaine en France" in J.-M. Berthelot (dir.) *La sociologie française contemporaine,* PUF, pp.21-28.

【引用参考文献リスト2】

上野修（2012）「スピノザとライプニッツ」、酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編『ライプニッツ読本』法政大学出版局所収。
エイトン、E.J.（1990）『ライプニッツの普遍計画』渡辺正雄他訳、工作舎。
岡部英男（2012）「ロックとライプニッツ　観念と人格の記号性」、酒井潔・佐々木能章・長綱啓典［編］『ライプニッツ読本』法政大学出版局。
カッシーラー、E.（1991）『シンボル形式の哲学 第二巻神話的思考』木田元訳、岩波書店。
カント、I.（2000）「自然モナド論」松山壽一訳、『カント全集2　前期批判論集』岩波書店。
北川忠明（1996）「デュルケムとロマン主義的近代批判」、佐々木交賢編『デュルケーム再考』恒星社厚生閣。
坂本賢三（1975）『機械の現象学』岩波書店。
ジンメル（1979）『社会学の根本問題　個人と社会』清水幾太郎訳、岩波文庫。
――（2004）「カントの物理的単子論」木田元訳、『ジンメル著作集』白水社。
スチュアート、M.(2011)『宮廷人と異端者　ライプニッツとスピノザ』桜井直文・朝倉友海訳、書肆心水。
セール、M.（1985）『コミュニケーション<ヘルメスⅠ>』豊田彰・青木研二訳、法政大学出版局。
――（1990）『翻訳 <ヘルメスⅢ>』豊田彰・輪田裕訳、法政大学出版局。
谷川多佳子（2006）「ライプニッツとスピノザ-バロック、実体、魂」『哲学・思想論集』35-65頁
タルド、G.（2008）『社会法則／モナド論と社会学』村澤真保呂・信友建志訳、河出書房新社。
デュルケーム、É（1985）「個人表象と集合表象」、『社会学と哲学』佐々木交賢訳、恒星社厚生閣。
ドゥルーズ、G.(1991)『スピノザと表現の問題』工藤喜作・小柴康子・小谷晴勇訳、法政大学出版局。
ドッス、F.（1999）清水正・佐山一訳『構造主義の歴史 上巻』国文社。
内藤莞爾（1988）『フランス社会学史研究』恒星社厚生閣。
日高六郎（2011）[1957]「機械時代における人間の問題」、杉山光信［編］『日高六郎セレクション』岩波書店。
フリードマン、G.（1966）「都市と田舎について」、『技術と人間』天野恒雄訳、サイマル出版会。
ベナール、Ph.（1996）「『社会学的方法の規準』から『自殺論』に至るデュルケームのタルド批判」佐々木交賢訳、佐々木交賢編『デュルケーム再考』恒星社厚生閣所収。
ホッブズ、T.（2015）『物体論』本田裕志訳、京都大学学術出版会。
村上勝三（2012）「デカルトとライプニッツ　ライプニッツはデカルトとどのように対決したのか」、酒井潔・佐々木能章・長綱啓典［編］『ライプニッツ読本』法政大学出版局。
門部昌志（2011）「ジョルジュ・フリードマンの軌跡－メディアとコミュニケーションをめぐって－」、『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』第12号、pp.167-179.
ライプニッツ、G.W.（1993）『ライプニッツ著作集 4　認識論　人間知性論上』下村寅太郎・山本信・中村幸四郎・原亨吉［監修］、谷川多佳子・福島清紀・阿部英男訳、工作舎。
――（2005）『モナドロジー　形而上学叙説』清水富雄・竹田篤司・飯塚勝久訳、中央公論新社。
――（2015）『ライプニッツ著作集 第Ⅱ期 1　哲学書簡』酒井潔・佐々木能章［監修］、工作舎。